

## 新設保育所における特別支援教育推進に関する研究 —園内研修による保育士の変化に着目して—

### 研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	シラトリ 白取 真実
所属等	貞静学園短期大学保育学科 講師
プロフィール	公立保育園での実務経験が 10 年あります。障害のある子どももいない子どもも含めた、インクルーシブ保育についての研究をしております。保育者が子ども前で、笑顔でいられることが、子どもの健やかな育ちに繋がると思います。そのような環境を整えることが将来的な目標です。

### 1. 研究の概要

本研究では、新設保育所において特別な支援を必要とする子どもを保育する場合の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

この研究の特色は、新設保育所に焦点を当てたことである。これまでの研究においては、新設保育所を対象とした研究の積み重ねは非常に少ない。小規模な新設認可保育所を対象を限定して調査を行い、実践に即した取り組みや課題を明らかにした点は独創的である。

### 2. 研究の動機、目的

2015 年に「子ども・子育て支援新制度」がスタートしてからは、認可対象施設の「量」の拡充が図られている。「待機児童ゼロ」を掲げ、保育所の新設が急ピッチで進んでいる中、保育士が集まらない、保育士の一斉退職など、子どもの保育の質の確保が追い付かない現状があげられる。新設保育所の増加は、そこで働く保育士や子どもへの影響が置き去りにされたまま進められているのである。このような背景から、保育の受け皿確保を背景に、すべてを一から積み上げていかなければならない新設保育所には、特有の課題があると考えた。

また、全国保育協議会によると、障害児保育を実施していると回答した保育所は全体の 76.6%にものぼる。障害のある子どもに加えて、特別な支援を必要とする子どもがいると回答した保育所は 8 割にも及び、その数は平均すると保育所 1 園につき 4.1 人である。保育所においては、障害のある子どもをはじめ、特別な支援を必要とする子どもの受け入れが進んでいる。これまでの研究によると、発達障害児や未診断の気になる子どもを保育する場合、保育士が困り感を抱いていることは多数報告されている。このことから、新設保育所で特別な支援を必要とする子どもを保育する場合、保育士、特別な支援を必要とする子どもをサポートする仕組みが求められると考えた。

### 3. 研究の結果

#### ①文献調査

公的資料、先行研究 5 点、新設保育所における現状と課題を明らかにした。現在の保育所の数の推移をみていくと、2014 年から 2018 年までの 5 年間に於いて、1 万ヶ所の保育所が新設されている (Figure1)。認可外保育所は、2014 をピークに数が減少しており、子ども・子育て支援新制度移行、認可保育所の数が増加している。また、保育所の設置主体としては、株式会社

が運営する保育所が、2007年度から2016年までに1,146ヶ所増加している。2016年の統計によると、認可保育所のうち、東京都・千葉県・埼玉県・神奈川県と首都圏が占める割合は、全国の75.5%である。保育所の設置主体の多様化は、首都圏や政令指定都市、中核市の一部に限定されたものであり、待機児童の少ない地方においては、多様化が進んでいない現状が理解できる。

これまでの先行研究を概観すると、園内研修に関するもの、保護者との信頼関係の構築、騒音等の音環境に関するものがあげられる。しかし、新設保育所を対象とした研究は少なく、保育所増加、設置主体の多様化に対応するためにも、研究の積み重ねが求められる。

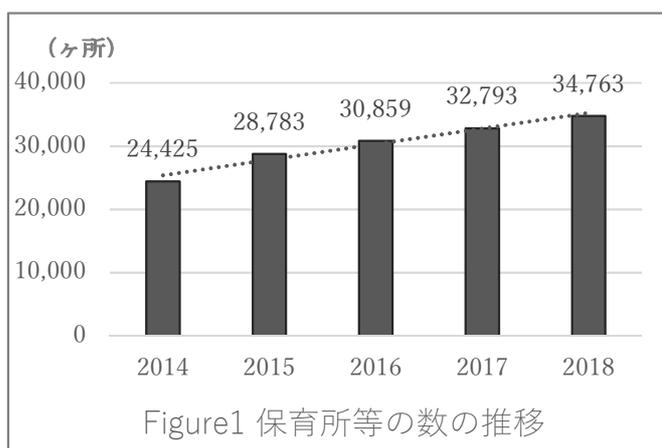


Figure1 保育所等の数の推移

## ②保育士に対するインタビュー調査について

S区にある私立認可保育所1園において、2017年10月より2018年3月までの間に、計6回の調査を行った。この保育所は、2017年7月より子どもの受け入れを開始し、2017年10月定員数となった。保育士に対するインタビューを分析した結果、以下の課題があげられた。

### 【保育環境について】

保育環境については、保育士間においてもよく話し合われており、新設保育所で保育を進める上で特に重要な課題であった。室内環境としては、子どもが集団の中で落ち着きがなくなった場合、気持ちを切り替えるための余分なスペースがないことが課題であった。新設された当初は、玩具の置き場所、子どもの活動に合わせた室内の設定等について、保育士間の意識をすり合わせる作業が行われていた。また、この保育所の特徴として、地域住民との関係で、園庭を使用できないという点があった。外遊びのために公園に出かける必要があり、毎日のように園外に出ることが保育士にとって大きな負担となっていた。特別な支援を必要とする子どもを含めたクラスを運営する上では、公園でパニックを起こしたり、集団と一緒に行動が難しかったりする時の対応が課題としてあげられていた。夏には、園庭とは別のスペースにテントとプールを設置し、子どもたちが水遊びを経験できるような工夫を行っていた。様々な課題について、それぞれの保育士のこれまでの経験から、出来ることと難しいことを話し合っているという点が特徴的であった。

### 【保育体制について】

保育所においては、当番勤務で保育を行うため、時間帯によって、活動内容に制限が加わったり、子どもの様子の変化したりすることが課題であった。特別な支援を必要とする子どもを担当した経験が乏しい保育士もおり、これで良いのか日々模索の中保育をしていると悩みを口にする保育士もいた。また、特別な支援を必要とする子どもに個別の対応が必要となる場面においても、保育士の人数の関係で個別対応が難しい、同じ保育士が続けて対応することが難しいという保育士不足の影響があげられていた。

### 【特別な支援を必要とする子どもも含めたクラス運営について】

新設された保育所では、子どもとの信頼関係作りを一から行わなければならない、保育士同士が子どもの特徴を把握して、できることと苦手なことを出し合っている段階であった。加えて、子ども同士の関係作りも一から行われている最中であることが報告されていた。特別な支援を必要とする子どもが集団に入れず、個別対応をしていると「どうして〇〇君はいいのに、ぼくはダメなの？」などと他の子どもが素直に質問してくることが報告された。そのことについて、みんなに同じ指導をできないことに葛藤する気持ちを抱いているという保育士もいた。しかし、開園後半年もすると、子ども同士も理解し合い、子ども同士の関係の構築が進んでいったという報告があった。

### 【保護者との関係について】

保育所において、保護者との関係作りは、保育を進める上で重要な課題であった。開園当初は、保護者の特徴をつかみ、特別な支援を必要な子どもについて、どの程度子どもの様子を伝えるべきかを探っている段階であった。子どもの様子が保護者に伝わらない段階では、「お母さんがわかっているのに目を向けようとしない」、「どこかの療育機関と繋がった方が子どものためになるのに」という報告があった。保育所での様子が保護者と共有できていないことに、ストレスを抱えていることがわかった。その後、徐々に保護者との信頼関係が出来始めると、「良いことも悪いことも話せるようになってきた」、「家での様子も話してくれるようになった」等の報告が聞かれるようになった。保護者との関係作りには難しさを感じている段階から徐々に関係を構築する様子を聞き取ることができた

### 【特別な支援を必要とする子どもについての課題】

特別な支援を必要とする子どもを保育する上で必要となる書類の作成については大きな課題があげられた。開園当初から毎日の日誌は書いていたが、個別の指導計画については、書式もわからずに、書式を作成するところから始めることとなった。また保育士は、特別な支援を必要とする子どもについて、自治体の関係機関との連携を図る必要性を感じているが、まだ行動には移すことが出来ていないという悩みを報告していた。どのようにしていけばよいのかやり方がわからないという悩みがあげられており、関係機関とのルート作りも課題であった。

### ③新設保育所に勤務する保育士の精神的健康度

インタビュー調査を行った保育所と同一の保育所において、一般的精神的健康調査票短縮版 GHQ30 を使用し、2017年11月と、2018年11月の計2回の調査を行った。精神科外来を含め、医療機関で臨床的な立場で使用する GHQ30 の得点は、6つの下位項目の点数により軽度の症状、中等度以上の症状として判断基準が設けられている。本調査による下位項目の平均は、希死念慮うつ傾向の項目以外は、全てにおいて軽度の症状を上回っており、特に一般的疾患傾向については中等度以上の症状とされる値を上回っていた (Table 1)。

一方で約1年後に、同じ GHQ30 を使用し調査を行ったが、睡眠障害、不安と気分変調の項目については、軽度の症状を上回ったものの、他の項目においては1回目の調査を比較して平均値が下回るという結果になった (Table 2)。

Table 1 GHQ30 下位尺度得点 (N=12) (1回目)

	軽度の症状	中等度以上の症状	本調査	
			平均値	標準偏差
一般的疾患傾向	2/5	3/5	3.25	1.48
身体的症状	2/5	3/5	2.50	1.04
睡眠障害	2/5	3/5	2.92	1.80
社会的活動障害	1/5~2/5	3/5	1.50	1.61
不安と気分変調	2/5~3/5	4/5	2.33	1.55
希死念慮うつ傾向	1/5	2/5	0.33	0.75

Table2 GHQ30 下位尺度得点 (N=11) (2回目)

	軽度の症状	中等度以上の症状	本調査	
			平均値	標準偏差
一般的疾患傾向	2/5	3/5	1.73	1.76
身体的症状	2/5	3/5	1.91	1.44
睡眠障害	2/5	3/5	2.36	1.67
社会的活動障害	1/5~2/5	3/5	0.73	1.35
不安と気分変調	2/5~3/5	4/5	2.09	1.88
希死念慮うつ傾向	1/5	2/5	0.27	0.62

この結果から、新設されて間もない時期は「一般的疾患傾向」といわれている項目や、気

分や健康状態、体の不調を感じる保育士が多かったものの、1年後には落ち着いてきていることが明らかになった。しかし、対象とした保育士の人数が少人数であること、精神的健康に影響を与える要因が仕事だけではないことを考慮する必要がある。

#### 4. これからの展望

現在非常に多くの保育所が新設されています。女性の社会進出に伴い保育所の新設が現在も進んでいる。そこで、保育士が集まらない現状や、一斉退職など、子どもの保育の質の確保が追い付かないという課題があげられています。本研究では、特別な支援を必要とする子どもを含めたクラス運営に焦点を当て調査を行いました。地域住民からの要望で園庭を使用できない現状や、保育士の離職問題等、課題は山積みであると感じました。

私は、保育士として10年勤務する中で、現場の声を形にすることの必要性を感じ、短期大学で研究者として歩み始めたばかりです。今後も、一歩ずつ研究活動を続け、保育士が働きやすい環境を整えることができる研究者になりたいと思います。笑顔で働く保育士が増えることが、子どもへの支援に伝わっていくと信じています。

#### 5. 社会に対するメッセージ

資格を持っていても保育士として働かない、潜在保育士が多数いると言われていています。子どもが好きで、先生を目指して資格を取ったのに関わらず、様々な理由から、保育士としての職につかない人が多いという現状は非常に悲しいものがあります。現在増加している保育所の多くは、決して十分な環境が整っているとは言えません。私は、園庭が使用できない、マンションの一室で保育スペースが限られている、人手が不足している保育所に他の保育所からヘルプが入る現状を目の当たりにしました。現場経験のある研究者として、保育士が働く過酷な現状を伝えていく必要があると強く感じました。

そのような中、限られた環境においても、保育を少しでも良くしたい、子どものために学びたいと願う保育士の皆さんの熱意で、本研究は支えられました。株式会社が運営する保育所、小規模保育施設等における、保育実践の積み重ねや、保育士に対する支援については、今後さらに研究の積み重ねが必要であると感じます。本研究は、一つの保育所の取り組みを、追跡した研究ではありますが、今後さらに調査数を増やし研究を進めていきます。

今回奨励金をいただいたことで、研究に必要な分析ソフト等を購入することができました。今後の研究活動においても活用していきます。また、広島で行われた、発達障害学会でのポスター発表も経験することが出来ました。他大学の先生方より、貴重なご意見をいただき、大変勉強になりました。ご支援をいただき、本当にありがとうございました。